

藤井讓治・伊藤之雄編著

『日本の歴史 近世・近現代編』

本書は、日本の近世・近現代の歴史の展開を、政治史のみならず隣接領域の研究成果も積極的に取り入れ、平易でありながらも大胆かつ斬新な筆致で記すことで、細分化した歴史にとどまらない歴史の大きな流れ、歴史の全体像を示そうとする意欲的な書である。近世を六章、近現代を七章に分けて、章ごとにテーマを設定し、十四人の研究者がそれぞれを分担・執筆している。また章の最後に設けられたコラムでは、研究の最前線の空気に触れることができる。第一章のコラム「惣無事令はなかつた」は、概説書や歴史教科書にも記載されている「惣無事令」について、その存在に疑義を投げかけたもので、その詳細については、既に本誌第九三巻第三号に、「惣無事」はあれど「惣無事令」はなし」として掲載され、現在も活発な議論が続いている。また、第七章のコラム「天皇制と文化財」では、近年の百舌鳥・古市古墳群の世界遺産登録へ向けた動きの中で、天皇陵の取り扱いを

巡る問題についても触れており、歴史学と現代的な課題を結びつけた記述がなされている。

近世編では、武家の国家、近世の対外関係、近世村の世界、近世の都市社会、転換する社会、近世の思想と文化の六章が設定されている。近世の山野は樹木が伐採され草山・柴山化が進行したとした、村の景観についての記述や、「鎖国」下にインドなどから輸入された更紗が身分や年齢を問わずに利用されていたとする、国境を越えた活発なモノの流れの記述、さらには禁裏御所への民衆立ち入りや御所千度参り事件等の近世の天皇に関する記述などは、従来の教科書的な近世像とは一線を画する、興味深い内容を含んでいる。また、近世思想について、思想家のみならず、大名から民衆に至る幅広い視野から描くことで、その特質や差異が明らかとなっている。一方、近年議論が盛んになっている近世の宗教については、全体として記載が乏しい印象を受けた。

近現代編では、明治維新と文明開化、立憲国家の展開と近代天皇、東アジア国際環境の変化と日本外交、帝国日本の発展と都市・農村、近代思想と市民文化、「帝國日本」の植民地支配、戦後日本と日米関係の七章が設定されている。このうち、第八章の「立憲国家の展開と近代天皇」は特に興味深く読んだ。帝國憲法の解釈により、君主機関説的な天皇として立憲君主国家を展開させた明治国家が、大正から昭和へと時代とともに大きく変質するその過程において、天皇自身も時に判断に迷い、あるいは失敗をし、その結果、未曾有の敗戦によって皮肉にも日本屈指の政治家としての天皇が登場する、とした記述は非常に刺激的であった。また、近現代史最大のテーマである、日米開戦へ至る戦争への突入過程については、天皇、思想・文化、外交、植民地等の視点からそれぞれその道程が示されており、これらの記述を比較することで、「大日本帝國」の戦争突入過程を立体的に理解することが可能である。特に、植民地からみた「大日本帝國」の視点は斬新に感じられた。更に、地主抑制策をはじめとした戦時制度が、戦後社会経済への遺産として少なからず有効に機能していたとの指摘は興味深かった。一方、近代の戦争そのもの実態やその展開については、一部で触

られているものの、記述が相対的に弱い印象を受けた。また、現代史については、一章を割り当てたのみであり、記述が乏しい。

紙幅の都合により、個別の章への言及がでなかつた部分もあるが、平易な筆致の中にも、最新の研究成果を前提とした斬新な記述が至る所でなされており、近世以降現代に至る四百年余りの日本の歴史の理解を、個別的事例の把握にとどまらず、大局的に、また重層的に深めることが可能な書となっており、「刊行にあたって」で示された、「個々の分野の動向を他時代、他分野の人たちも理解できるように整理・提示し、新たな展望への足がかりを築く」とも日本史を魅力あつかう豊かなものとすることを目指す」とした目標には、十分応えられていると考える。最後に、本書は二分冊が予定されており、続編の「古代・中世編」にも期待したい。

(A5判 三九〇頁 二〇一〇年五月)
 ミネルヴァ書房 税別二八〇〇円
 (吉野健一 京都大学大学院文学研究科博士課程)

ベルナル・レミイ著、大清水 裕訳

『ディオクレティアヌスと 四帝統治』

本書は、文庫クセジュに収められた、ローマ皇帝の一人ディオクレティアヌスの治世と彼の業績に関する翻訳書である。同帝が行った政策と諸改革が手際よく解説されている。

ディオクレティアヌス個人とその治世は、史料そのものの不足と偏向のため、様々な位置づけられ、毀誉褒貶を被ることが多かった。彼は、キリスト教徒に対する迫害者であり、また後期帝政最初の皇帝でもある。そのため、帝国の再建者とされもしたし、帝国の権威主義化・全体主義化の責任者のように扱われもした。四人の皇帝による統治という政治プランは当初から計画づくであったとする研究者もいれば、逆に残りの皇帝に対するディオクレティアヌスの主導権と統率力を疑う者もいた。著者のレミイは、ディオクレティアヌスは「明晰で現実的な政治家」であると捉え、利用可能な史料を動員し、彼の治世を描く。

レミイの叙述はイデオロギー的に偏ったところのないニュートラルなものと評してよいだろう。過度に革新性を強調することもなく、その施策の全てをマイナスの方向に読み解くようなこともしない。たとえば、税制については、欠陥もあつたが概ね効率的であり、都市行政への負担・介入を強調しすぎるべきではない、国家による経済統制などなかつたと述べている。これ以後のローマ史を眺める際にも、このような視点を採用してみてもどうだろうか。

結論の部分で、少しだけ、レミイは長いタイムスパンからディオクレティアヌスの評価を行っている。彼は「最後のローマ皇帝」であり、次のコンスタンティヌスはビザンツ帝国という新体制の創設者である。その点では、レミイは後期帝政の統治体制の形成ではなく、キリスト教とローマ帝国の関係の変化の方に時代の画期を見出していると言えるかもしれない(もちろん本書は別にキリスト教中心史観を採用しているわけではない)。

ここからは訳について。まず、訳者が選んだ「四帝統治」という語。これはテトラキア(仏語では tetrarchie)を訳した